イタリアにおける職業学校を基礎にした中学校モデルの実験

―― ウマニタリア協会の「進路・職業の準備学校」（1956～1963）に注目して ――

中嶋佐恵子

はじめに

本稿は、ミラノ市に本部を置くウマニタリア協会が、イタリアで中学校の統一化が実施される1963年まで、それに向けた新しい学校の試みとして設置した「進路・職業の準備学校」（Scuola di preparatoria di orientamento e di avviamento professionale）以下、「準備学校」と略称する）を対象とし、その意義と限界を考察するものである。

「準備学校」は、ウマニタリア協会が従来の職業学校の枠の中で、統一中学校の理想に近づけるべく、可能な限りでカリキュラムに変更を加え、実践を行なった学校であり、統一中学校の実験学校と言ってよい。カリキュラム以外にも、ウマニタリア協会の寄宿型成人教育活動である「成人教育のための合宿コース」（以下、合宿コースと略称する）[1]において教員研修を行うといった独自の特徴も備えている。これらのことから、「準備学校」に注目することは、「準備学校」とイタリア民衆教育連合の中心を担ってきたウマニタリア協会の歴史的特徴との関連を問うことにより、イタリア民衆教育・成人教育史のイタリア的特徴に迫るという点において意味があると考えられる。

「準備学校」については、最初の３年間を終えた時点でウマニタリア協会が編集した共著『職業学校から中学校へ―ある改革の経験』[2]がその全体像を最も体系的に詳しく伝えていると言える。それ以外には、「準備学校」の実践が始まった当初の紹介がいくつかある[3]ほかに、「準備学校」が中学校に転換した後、ガストーネ・タッシナーリが全体像をその要点を特徴づけながら紹介する[4]など、関係者による叙述が散見される。戦後ウマニタリア協会会長を務めたリッカルド・バウエルを追悼する研究集会（1984年５月５日－６日、ミラノ）の記録には、「準備学校」が存在していた当時のウマニタリア協会の学校教育事業責任者アントニオ・キャッパーノ、教育学を専門とする協力者フランチェ

スコ・デ・バルトロメイスとタッシナーリ、３名それぞれの「準備学校」についての論考が収められており、なかでもキャッパーノが「準備学校」の特徴を教員集団という点から詳しく論じているのは興味深い[5)]。

また、自らも実験的な学校を設立・運営していたエルネスト・コディニョーラは、教育実践の革新的な試みの例の一つに「準備学校」を挙げ、「特別な価値を帯びる」ものと評している[6)]。ジョルジョ・ピザーノはイタリアの学校改革における準備学校の意義に迫ろうとしており、前期中等学校改革の最も大きな争点となった、ラテン語は是か非かといった「誤ったジレンマ」に対して、「準備学校」はさらに「進んだ、導くのに困難な実験」を提供したことを評価している[7)]。

本稿は、これらに学びながら、イタリア民衆教育とウマニタリア協会の活動の歴史を踏まえ、そこから生まれた学校構想がいかなる可能性を示し得たかという視点から「準備学校」の意義を明らかにしたい。

１．統一中学校成立の経緯と論点

ここでは中学校の新しいあり方が議論されるようになった戦後まもなくから、統一中学校が成立するまでの経緯を、その中で浮かび上がった論点に即して簡潔に示したい。

新しい中学校のあり方をめぐる議論の争点は、統一するか種別化するか、「ラテン語」は是か非か、自然科学を導入するかどうかであった。1963年に統一される以前の中学校は、人文的教養を主な内容とするもので、とくにラテン語の教育が重視され、一方で自然科学の教育は欠如していた。また小学校に続く学校には、この中学校のほかに、大学に接続する上級学校に接続しない職業学校や美術学校などがあった。このように８年間の義務教育は５年間の小学校の後は複線化しており、中学校はエリートを養成するための学校として機能していた。

1951年７月13日、公教育大臣ゴネッラは中学校改革の内容を含む法案2100号を提出した。これは小学校の後に進む学校として古典系中学校と技術系中学校、小学校に置かれる「師範」学校の３種を構想するものであった。1955年になると、イタリア共産党は統一された小中一貫校、「ラテン語」の廃止、中学校への自然科学の導入などを提起し[8)]、1959年１月に同党が上院に提出した法案359号では、小学校と中学校の区別は維持しながら、無試験で接続するとした[9)]。

政府は再び、人文、技術、美術、師範の４種に分かれる学校を提起し、統一がますます対立的な争点となった。そして1960年、メディチ大臣によって提出された法案904号は、中学校は統一するが、２年めからラテン語、科学的観察、美術実技のいずれかを選択すること、10年制の「師範学校」を設置することを提案した[10)]。

鮮明な対立点がある中、1962年12月31日、中道左派政党間の協力、同時に社会党、共産党、キリスト教民主党の一部の一致協力を背景に[11)]、法律1859号が成立した。これにより、小学校修了後に進む学校は文系、理系といった種別のない統一中学校となり、カリキュラムには自然科学が導入された[12)]。中学校は、人文的教養に偏り自然科学を欠いたエリート養成の学校から、憲法で規定された14歳までの義務教育の学校にふさわしく、すべての子どもに同様の幅広い教育と進学の機会を提供し得る学校へと転換した。

一方、争点の一つである「ラテン語」については、中学校２年めから「基礎知識」としてイタリア語の授業に組み込まれ、３年めは選択という形で残ることになった。このことから、この改革は意義が認められる一方で「妥協の産物」[13)] であるとの批判もなされた。「ラテン語」は、1977年６月16日の法律348号により、廃止されることとなる。

教育内容については、「実践的で生産的な労働に関わる」内容を除外することで、「文化的で教育的な中身を骨抜きにし」[14)] たという指摘もされている。

統一中学校成立後には、教師の準備不足が顕著に見られ、さらに一部の教師が自分の意志に逆らっている状況も顕著であったという。後者の状況について、例えば、以前からの中学校で教えることを自慢する教師があまりにも多かったことが挙げられている。そして以前からの中学校と、職業学校から転換した中学校との間の差異は長く続いたとされる[15)]。

２．「準備学校」の構想と展開

戦後、新しい中学校のあり方が模索される中、「準備学校」は1956年度に創設される。法的には工業分野の男子職業学校（scuola di avviamento professionale a tipo industriale maschile）として認可を受けており、労働・社会福祉省から補助金を受けている。小学校の卒業資格を持つ11歳から14歳までの男子を対象とする３年制で、１クラスは25人前後からなっている[16)]。時間割は月曜から金曜までは１日８時間、土曜は午前中のみとなっている[17)]。以下に、「準備学校」の全体像を概略する。

⑴　「準備学校」の理念

「準備学校」は、憲法に規定された14歳までのすべての子どもへの義務教育をおこなう前期中等学校の理想を求めて、特定の職業のための訓練ではなく、学校の課程を修了する時点で自分にふさわしい進路選択を可能にするような学校として構想された。

当時のウマニタリア協会会長バウエルの言葉を借りれば、ウマニタリア協会は「すべての人の利益になるような技術的で教育的な実験のセンター」となることを意図していた[18)]。その意図からすれば、中学校のあり方が問われ、具体的に改革が必要とされる中で、ウマニタリア協会が中学校モデルの提案をすべく実験に取り組んだのは当然のことであったといえよう。

バウエルは、ウマニタリア協会によって運営される学校は「生活を学校の中へ持ち込む」という原則に支えられていたと述べる。また学校は「生徒の自己形成」を可能にすべきであり、生徒が「観察」し、「着想を得て自分で探究」するための「刺激」であるべき、すなわち「本質的に自発性に基づいているべき」であると考えていた[19)]。

「準備学校」の目的は、当時のウマニタリア協会学校事業局長キャッパーノによれば、1956年の夏、次のように決定されたという。「準備学校は労働の学校と定義することができる」。それは労働を「教育的な条件かつ機会として理解する」限りにおいて、あるいは労働を「生徒に“科学的な”態度と、人間として、市民としての自分の責任の意味を見出し発達させることを可能にする実験の有機的過程として理解する」限りにおいてである[20)]。教育と労働の結合を志向する意図がうかがえよう。

⑵　カリキュラム

「準備学校」のカリキュラムは以下のようである。

表１　「準備学校」の各教科・科目の週あたりの時間数

	１年生	２年生	３年生
宗教	1	1	1
イタリア語、歴史、地理、公民	8	8	8
外国語	3	2	2
数学、物理、化学	5	6	6
工業技術（と工業技術実験室）	—	3	3
製図・デッサン	6	6	6
歌唱	1	1	1
実習　鉄（と表現技術）	4	2	2
木材	4	2	2
陶器の造形	—	2	—
彫版術	—	—	2
工作	—	2	2
化学と物理	—	2	2
体育	2	2	2
計	34	39	39

（Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, p.28.）

これと工業系男子職業学校、工業系女子職業学校、さらに当時の中学校のカリキュラムとして規定されていたものとを比較するために、それらのカリキュラムを「準備学校」のに付き合わせてみると以下のようである。

表２　「準備学校」のカリキュラムと、それに工業系男子職業学校、工業系女子職業学校、中学校のカリキュラムを突き合わせた各教科の週あたりの時間数

	準備学校			職業学校[21]（工業・男子）			職業学校[22]（工業・女子）			中学校（1962年度以前）[23]		
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
宗教	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
イタリア語、歴史、地理、公民	8	8	8	7	6	5	7	7	6	16	15	15
外国語	3	2	2	3	3	3	3	3	3	—	3	3
数学、物理、化学	5	6	6	6	7	6	7	5	—	3	3	3
工業技術（と工業技術実験室）	—	3	3	—	3	5	—	—	—	—	—	—
製図・デッサン	6	6	6	6	6	6	4	4	4	2	2	2
歌唱	1	1	1	1	1	1	1	1	1	(1)	(1)	(1)
実習	8	10	10	8	10	10	7	7	7	—	—	—
体育	2	2	2	2	2	2	1	1	1	—	—	—
計	34	39	39	34	39	39						
保健							—	—	1			
家政学							2	4	6			
計							33	33	33			
体育と労働（男子）、体育と家政学（女子）										4	3	3
計										26 (27)	27 (28)	27 (28)

＊選択科目の場合は時間数を（　）に入れている。

「準備学校」のカリキュラムにおいては、工業系男子職業学校としての基準を満たすという制約がある中で、工業系男子職業学校のよりもイタリア語、歴史等の分野の時間数を増やしており、代わりに理系科目、工業技術の分野で時

間数を減らしている。中学校では必修であったラテン語はなく、中学校では欠如していた物理と化学がある。

また、時間数は同じであっても工業系男子職業学校とは内容を変えているのは、「準備学校」における「製図・デッサン」（disegno）と男子職業学校の「製図」（disegno tecnico）、両学校の「実習」である[24]。男子職業学校の「製図」は、幾何学的な製図を主としており、職業に直結する訓練にねらいをおいているといえる[25]。それに対し、「準備学校」の「製図・デッサン」は、「次期尚早な職業的特徴」を退け、「幾何学的・技術的」なものだけではなく「解釈」と「表現」の要素を導入しているという[26]。

「実習」については、「準備学校」の「実習」の科目は６分野からなるのに対し、男子職業学校の「実習」は、「木材」と「金属」の２分野からなる。「木材」は１年生のみであるので「金属」が多くを占めることになる。「金属」は鉄筋、導線、鋼鉄の薄板、軽合金による製作、鍛造、溶接、研磨器とドリルの用法などからなっており、「製図」の場合と同様のことが言えよう[27]。

このように「準備学校」は、可能な範囲内で教科の時間数と教育内容に変更を加え、従来と異なる学校教育の創造を目指していることがわかる。

⑶　教育方法

特徴的なものを２つあげよう。

①実験室活動

実験室活動の時間は「実習」に組まれており、「木材」、「鉄」、「陶器」、「彫版術」、「工作」、「科学実験」それぞれの実験室が用意されていた[28]。

②グループワーク

グループワークは、「協力する習慣を身につけ、自主的創意に基づく探求方法を獲得すること」を目的としている。テーマは、生徒から自由に提案する場合、教師が指定した中から選択する場合、教師が指定する場合がある。他の教科と共通のテーマを設定する場合は、担当教員同士の事前の打ち合わせを必要とする。グループの構成は、批判的探求や議論に取り組むごとに生徒が自発的に決めるか、あるいは教師が介入していた。授業の場所として、校内の教室、実験室、ウマニタリア協会学校図書館などのほか、地域の博物館、図書館なども活用された。結果がまとまった時は、クラス全体に向けて各グループが報告し、それを受けてより深めるための議論をする[29]。

⑷　教師

「準備学校」の教師は、年度開始の前に全員が８日間の合宿コースに参加し、経験の共有、濃密な人間関係の構築、相互理解、考えの交流、教育方法の実践、集団的評価などを行う[30)]。

また作業グループあるいは学習グループを構成し、日常の教室活動とともに各グループの活動を行う。作業あるいは学習グループには、「助言者と専門家との情報グループ」、「教育心理学的援助事業、精神工学的援助事業、社会福祉事業、医療事業の専門家との調整グループ」、「学級グループ」などがあった[31)]。

⑸　授業以外の活動

授業以外に展開された活動についても見ておこう。すでにあげたもの以外に主なものを挙げると以下のようである。

①家族との関わり

1957年11月から、月１回の父母会が行われるようになった。父母たちから提起された問題について議論し、回を増すごとに出席者数は増えていった[32)]。また学校ケースワーカーは生徒の家族と関わり、家庭訪問を行う[33)]。

②健康管理、心理学専門家の活動、学校福祉事業

生徒の健康管理については、すべての生徒は年度の初めに医者の診察を受け、その後、学校医の提起的なコントロールを受ける[34)]。心理学専門家の任務には、進路指導、学校福祉事業の調整、カリキュラムの策定と実施状況の点検を学校運営部局との協力により組織すること、教育上の手配・手続きや教育方法の実験と点検、教員研修の組織、学術研究の企画と参加がある[35)]。学校福祉事業には、前述の学校ケースワーカーの活動のほか、困窮者への本・ノート・文房具・衣類・薬・夏休みの寄宿代などの提供、本・文房具等の購入のための金銭の無利子貸与などがある[36)]。

③給食

遠方からの通学者で昼休み（12：40－14：30）に学校に残って昼食をとりたい生徒のために給食サービスをしている。1957年度には約150人が利用した。家から持参した飲み物を用意された電熱器で温め直して飲むほかに、学校から安価で提供される温かい料理を食べられる。無料の補助食品（ジャム、チョコレート、果物、チーズ、缶詰の肉）が「国際援助のための行政」（Amministrazione per gli Aiuti Internazionali）から寄せられ学校から提供された[37)]。

④昼休み

昼食後、生徒たちは遊び、勉学などで自由に過ごす。そのために学校が採用した有給の職員がそれを援助する[38)]。

⑤課外活動

毎週土曜の午後に博物館、工場、観劇などへのツアーが組まれ、希望者は参加できる[39)]。学期の終わりにも遠足、見学が組まれる。休暇中には臨海学校や林間学校が組織される。また日曜の午後、父母会の時には並行して映画上映会がもたれる[40)]。

⑥自由活動

1961－62年度、自由活動のグループがつくられる。いろいろなクラスの生徒からなり、好きな活動を選べる。映画、演劇、音楽、絵画、模型飛行機の製作、学校新聞の編集など、多種多様なグループができた[41)]。

⑦生徒の自治活動

1962－63年度にクラスの代表者会議を組織し、それによる自治の実験を始めた[42)]。

⑧学校新聞

学校新聞 Radar が発行されている[43)]。

⑹　認識されていた問題

これまでに見たように既存の枠内での教科の時間数の変更、独自の実習内容、実験室で行う科目の多様性、生徒の自発性を活かしうる自治活動や自由活動、家族と健康管理への配慮など、学校の理念を具体化する工夫が見られる一方で、生徒の問題状況の厳しさが明らかになってきた。1960年にキャッパーノが学校事業責任者としてミラノ教育委員会の長に送った文書は、中等学校の大衆化がもたらした学校人口の平均的な文化的レベルの顕著な低下を指摘した上で、「準備学校」の生徒から痛感することとして以下の点を挙げている[44)]。

①小学校で身についた乏しい学習の習慣
②家族が生徒に行使すべきコントロールの不足あるいは欠如
③文化的刺激の乏しい環境に属していること
④快適な住環境の欠如
⑤職業学校のとりわけ負担の多い授業時間数

⑥休息時間の不十分さ
⑦公式のプログラムが生徒の現在の関心に十分応えるものでないこと
⑧読み書き算の基本が十分でないためにその上に作られたプログラムの理解が困難なこと

ここには、当時のイタリアの教育、文化における問題状況が現れていると同時に、それに応えることを困難にするカリキュラムの限界や授業時間数の問題、そして生徒の家庭生活やそれを取り巻く状況への働きかけにおいてなお課題が残されていること、が読み取れる。

また教員の雇用にも問題が生じていた。1961年度以降、労働・社会福祉省から「準備学校」への補助金が削減され、クラスの数を減らさざるを得なくなり、「準備学校」立ち上げ以来の熟練した教師たちの大部分が止むを得ず辞めていく事態に見舞われていたのである[45)]。

3.「準備学校」の特徴

「準備学校」の特徴には、先述した文献などにおいてもすでに指摘されているように、職業学校のカリキュラムを基に改変したカリキュラム、実験室活動とグループワーク、教員の合宿コースへの参加、教育活動と有機的に結合した医療・心理・福祉事業などが挙げられる。本稿では「準備学校」を民衆教育・成人教育史に関連づけて考察するため、なかでも職業学校と合宿コースに焦点を当てたい。

⑴ 職業学校

ウマニタリア協会は、20世紀初頭に小学校卒業資格のある12歳以上15歳までの男子を対象とする２年制の「美術工芸の訓練のための男子職業学校」を開設している。この学校には、木工、鉄工、貴金属加工の３つの部門がある。一般教養と職業教育の教科があり、一般教養は「イタリア語（歴史と地理の基礎知識の教授を通してイタリア語を学ぶことも考慮されている）」、「算数と幾何学」、「自然史の初歩」、「物理学・力学の初歩」、「工業技術の初歩」、「初歩の保健」、「市民道徳の基礎知識」からなっていた。職業教育は「デッサン・製図」、「木工」、「鉄工」、「彫刻・彫版術・金銀細工」からなっていた[46)]。

1911年のウマニタリア協会の報告書によれば、この学校の一般教養は「別個の学科目」の集まりではなく、「労働者の要求に応える」「基礎的な教養」を与

えるにふさわしい「整理された一まとまりの知識として」考えられているという。また職業教育は、「単一の部門において熟練し、専門化している」ような「工員を養成することを目的としてはならない」という。なぜなら、「そのような工員は工場でしか養成され得ないと考えられる」からである。すべきことは、そこから自分の適性に応じ、それぞれの分野の具体的な職業の技能に近づけるような方法で、「木工、鉄工、貴金属加工の技能に関わる職業労働の論理的基礎を与えること」である、という[47)]。

女子についても12歳以上の者を対象とした女子職業学校を開設している。これもウマニタリア協会の他の職業学校と同じ考え方で構想されているという[48)]。

このような小学校卒業後の子どもを対象とした職業学校についての戦後のウマニタリア協会の捉え方をみよう。同協会の1961年の報告書が20世紀初頭に開設された同協会の男子職業学校について述べているところによれば、その学校は「短期間で職業に就けるような訓練をするという要請に応えるものであっても」、「しっかりした文化的基礎」と「現実の観察、正しい表現を見極める力、市民の連帯の志向」を身につけ、同時に「より適性のある職業の選択」を助けるという要請に応えるべきであるという。そして、こうした伝統は「準備学校」の構想を比較的容易にしたという[49)]。

戦後ウマニタリア協会の会長を歴任したバウエルは、1951年、職業学校は「労働者の精神（あるいは知性）（mente）、個性（carattere）、人格を形成する学校であり、とりわけ方法（metodo）の学校」であると述べている。「工員を作り出す」のではなく、「生徒たちが、自分が手を加える材料に固有の特徴や、使用し管理しなければならない道具の性格」に適した方法で働くことに「備えさせ、慣れさせる」ように方向づけるのであるという[50)]。

こうした戦前・戦後にわたり見られるウマニタリア協会の教育観が、「準備学校」の構想に受け継がれているといってよかろう。

⑵　合宿コース

ウマニタリア協会の合宿コースは1950年に始められ、約１～２週間の短期コースに、小中学校教師、ソーシャルワーカー、成人教育・文化活動家、図書館職員、企業の管理職従事者・事務職員、工場労働者、労働組合活動家、行政機関職員などが参加した[51)]。合宿コースには、フィレンツェ学派と呼ばれる教育学の系譜に連なる教育学者が協力していること[52)]、学習方法においてディスカッションとグループワークが重視されていること[53)]などの特徴を見ること

ができる。

「準備学校」については、学年度が始まる前の９月に、マッジョーレ湖畔メイナにあるウマニタリア協会の合宿センターで８日間の研修が行われ、校長、教員、協力者が参加した[54)]。学習方法は、他の合宿コースと同様にディスカッションとグループワークに基づいている。

合宿中は毎日、一般的な問題に関する導入の授業の後、１つか２つの演習が行われる。午後の前半には、グループワークにより、その日の午前中に行われた授業を分析し、明るみに出た問題に取り組む。午後の後半には、すべてのグループが集まり、全体討論を行う。夕食後はパーティーができる。導入の授業で取り上げられたテーマには、「ディスカッションの方法と技術」、「グループワークの技術」、「成長期の心理学」、「活動主義学校の諸原則」、「評価の技術」、「学校・職業の進路指導」、「職業学校と準備学校」などがあった。演習では、各自が順番に講義や演習を行い、他の参加者は生徒役になる。それぞれの終了後、全員で批判的に分析する。演習のテーマには、「読書サークル」、「歴史の授業」、「市民教育の授業」、「映画スライドの利用」、「黒板の使用」、「テープレコーダーを使った英語の授業」などが見られた[55)]。

協力者には、教育学的見地から全般的計画策定において学校運営部局と責任を共にする助言者がおり、彼らは授業を持ち、グループワークと全体討論において専門家の代わりを務める[56)]。これら助言者は合宿コースの目的を果たす上で「決定的と言える程度まで」、なかでも教育学の立場からの助言者は「特別な方法で」、貢献しているという[57)]。

教育学の助言者を務めていたのは、トリノ大学のデ・バルトロメイスで、フィレンツェ学派の系譜に連なる教育学者である。1956－1957年度にフィレンツェ大学教育学部を卒業した[58)] 協力者のタッシナーリも同様である。彼らが「準備学校」の教育方法に影響を与えている程度の大きさを窺い知ることができる。

キャッパーノは、後に「準備学校」を振り返って、ウマニタリア協会の合宿コースにより「成人教育の方法と精神」に出会ったことが決定的であったと述べている。伝統的な方法とは「まったく異なった方法」を学んだという[59)]。彼が指摘するように、合宿コースとグループワークという成人教育からもたらされた手法が学校の教育実践改革に寄与したと言えよう[60)]。

４．「準備学校」の転換

1963年度からの統一中学校制度実施に伴い、「準備学校」は中学校に転換し、

1964年度から国立エウジェニオ・コロルニ（Eugenio Colorni）中学校の分校となった。とはいえ、創設以来の実験の目的に従って教育活動における幅広い自治権が認められているという[61)]。また国立学校となることで財政危機から脱することになった。

タッシナーリの1966年の論文によれば、中学校に転換した新しい学校は、従来からの特徴を徐々に取り戻そうとしていたという。従来の特徴を保つためには、中学校について規定されている週あたりの授業時間数を超える時間が必要となるため、午後の「放課後」（doposcuola）を活用して補い、この「放課後」については経費のすべてをウマニタリア協会が負担することになる[62)]。

このように「準備学校」が統一中学校に転換した後も、その枠内で独自の実験を継続する努力がなされていた。

おわりに

「準備学校」は、「ラテン語」の非開設、自然科学の導入、実験室における実践的教育、午後の教育と給食の提供など、当時の中学校とは異なる中学校モデルを実践していた。統一中学校において自然科学が導入され、「ラテン語」は1977年度に廃止されたという点で、「準備学校」の構想と実践は先駆的であったと言えよう。

そのような実験が可能となったのは「準備学校」が中学校ではなく職業学校を基礎にして作られたことによる。そして「準備学校」の実践を支え、その中で貫かれていた教育観は、職業学校と合宿コースをはじめとするウマニタリア協会の経験から生まれ、育まれたといってよい。

「準備学校」のカリキュラムは、職業学校の枠組みという制約を受けていることにより、イタリア語、歴史、地理を中心とする人文・社会的教養の位置づけが相対的に低くなったこと、実習科目が工業分野のみとなっていること、中学校に比して授業時間数が多いことにより生徒の負担が大きいこと、高校・大学進学までを見通した学習内容と学力の保障という点で適切かどうか懸念があること、男女共学ではなく男子のみであったこと、などの限界を持たざるを得なかった。また国立学校ではないことから財政危機を避けることができなかった。

そうでありながらも「準備学校」の実験は、イタリアの学校改革において極めて重要な位置を占めていた統一中学校の実現に向けて、先駆的な内容を実行して示したところに意義があるといえよう。しかし、それだけではない。20世

紀初頭からイタリア民衆教育連合で共有されていた民衆教育の領域には、幼児教育、小学校とその補完事業、職業学校、民衆大学・民衆図書館などの成人教育・民衆文化機関が主要な柱として位置づいていた。そこには、学校教育と学校補完事業（学校扶助、学童保護）を一体的に捉える発想、すなわち教育と福祉の統合の視点が見られるほか、教育と労働の結合、さらに一般教育と職業教育の統合の視点を見ることができる[63)]。これらの視点が「準備学校」においてその特徴として息づいていることに、イタリア民衆教育史における「準備学校」の意義があると考えられよう。

「準備学校」はイタリア民衆教育の歴史的土壌の上に生まれ、成人教育と結合し、その手法に支えられた。ウマニタリア協会による中学校の統一のあり方を模索する実践は、民衆教育の包括性と統合の視点を学校改革に活かす試みであったと言ってよかろう。そしてその統合の視点とは、生涯（統合）学習につながる視点であると言ってよい。

注

1）中嶋佐恵子「イタリア寄宿型成人教育の展開―1950年から1965年までのウマニタリア協会を中心に―」姫路獨協大学教職課程研究室『教職課程研究』第32集（2022年２月）参照。

2）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento. Esperienze per una riforma*, La Nuova Italia, 1960.

3）Antonio Chiappano, *Le scuole dell ‘“Umanitaria”*, in “Tecnica ed Organizzazione”, n.32, 1957. Chiappano, *Contributo della Società Umanitaria alla riforma della scuola di avviamento*, in “Mondo Economico”, n.2, 1958.

4）Gastone Tassinari, *La scuola dell’ Umanitaria*, in “Scuola e Città”, n.4-5, 1966.

5）Mario Melino (a cura di), *Riccardo Bauer. La militanza politica, l ‘opera educativa e sociale, la difesa della pace e dei diritti umani*, Franco Angeli, 1985. Chiappano, *La formazione degli insegnanti*, in *ivi*, pp.167-177.

6）Ernesto Codignola, *Le 《Scuole Nuove》 e i loro problemi*, La nuova Italia, 1962, p.170. (prima edizione: 1946, 4ª edizione aggiornata: 1962.)

7）Giorgio Pisano, *Un’ eredità della Resistenza: La scuola preparatoria dell’ Umanitaria*, in “Cultura Popolare”, n.5-6, 1975, p.159.

8）Giorgio Bini, *La riforma della scuola dell’ obbligo*, in Mario Gattullo, Aldo Visalberghi (a cura di), *La scuola italiana dal 1945 al 1983*, La Nuova Italia, 1986, p.86.

9）*ivi*, p.88.

10）*ivi*, p.89.

11）*ibidem*.

12）統一中学校（scuola media unica）1963年度以降の各教科の週あたりの時間数

	1年生	2年生	3年生
A）必修科目			
1．宗教	1	1	1
2．イタリア語	6	—	6
イタリア語、ラテン語の基礎知識	—	9	—
歴史、公民、地理	4	4	4
3．外国語	2	3	3
4．数学	3	3	3
観察、自然科学の基礎	2	2	3
5．美術	2	2	2
6．技術応用	2	—	—
7．音楽	1	—	—
8．体育	2	2	2
計	25	26	23
B）選択科目			
9．ラテン語	—	—	4
10. 技術応用	—	2	3
11. 音楽	—	1	1
合計	25	27－29	24－31

Decreto Ministeriale 24 aprile 1963.

13）Giorgio Canestri, Giuseppe Ricuperati, *La scuola in Italia dalla legge Casati a oggi*, Loescher Editore, 1985, p.196. (prima edizione: 1976)

14）Salvatore Valitutti, *Scuola e lavoro*, Cadmo, 1979, p.38.

15）Dario Ragazzini, *Storia della scuola italiana. Linee generali e problemi di ricerca*, Le Monnier, 1983, p.68.

16）Sucola preparatoria di orientamento e avviamento professionale, *Scrutini ed esami*, 1959/188 n.2（タイプ打ちの原資料の一部でこのタイトル部分は1枚からなる。）などによる。

17）Tassinari, *op.cit.*, 1966, p.223.

18）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, p.14.

19）*ibidem*.

20）*ivi*, p.57.

21）職業学校（工業・男子）（scuola di avviamento professionale a tipo industriale maschile）の各教科の週あたりの時間数

	1年生	2年生	3年生
宗教	1	1	1
イタリア語	4	3	3
歴史と地理	3	3	2
外国語	3	3	3
数学	6	4	3
物理と化学	—	3	3
工業技術	—	3	3
工業技術実験室	—	—	2
製図	6	6	6
合唱	1	1	1
実習	8	10	10
体育	2	2	2
計	34	39	39

"Scuola di avviamento industriale. Scuola tecnica industriale: Sezione meccanici. Sezione elettricisti. Sezione motoristi. Sezione radiomontatori.: Orari e programmi d'insegnamento (Circ. 2 settembre 1947 n.54. Educazione civica (D.P.R. 13 giugno 1958 n.585. Esami di Licenza (Circ. 3 agosto 1949 n.78)", L. di G. PIROLA, Milano, 1964, p.3.

22）職業学校（工業・女子）（scuola di avviamento industriale femminile）の各教科の週あたりの時間数

	1年生	2年生	3年生
宗教	1	1	1
イタリア語	4	4	3
歴史と地理	3	3	3
外国語	3	3	3
数学	4	3	3
物理学・自然科学	3	2	—
保健	—	—	1
製図・デッサン	4	4	4
合唱	1	1	1
家政学	2	4	6
労働実習	7	7	7
体育	1	1	1
計	33	33	33

"Orari e programmi per la scuola di avviamento industriale femminile. Circ. Min. 22 settembre 1948, n.63 Prot. 8990", L. di G. PILORA, Milano, 1950, p.1.

23）中学校（scuola media）1962年度以前の各教科の週あたりの時間数

	1年生	2年生	3年生
宗教	1	1	1
イタリア語、ラテン語、歴史、地理	16	15	15
数学	3	3	3
外国語	—	3	3
製図・デッサン	2	2	2
体育と労働（男子）、体育と家政学（女子）	4	3	3
音楽と歌唱（選択）	(1)	(1)	(1)
計	26（27）	27（28）	27（28）

D.L.L. 7 settembre 1945, n.816.

24）*ivi*, p.28 にこの指摘がある。

25）*ivi*, p.28. *"Scuola di avviamento industriale. Scuola tecnica industriale."*, L. di G. PIROLA, 1964, pp.11-12.

26）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, p.29.

27）*"Scuola di avviamento industriale. Scuola tecnica industriale."*, L. di G. PIROLA, 1964, pp.12-13.

28）Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1956 al 1960*, 1961, p.43.

29）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, pp. 99-101.

30）Chiappano, *La formazione degli insegnanti*, pp.172-173, in Mario Melino (a cura di), *Riccardo Bauer*.

31）*ivi*, p.173.

32）Scuola Preparatoria di Orientamento e di Avviamento Professionale, *Relazione finale-anno scolastico 1957-58*, p.3.

33）Scuola preparatoria, *Rapporti tra scuola e famiglia*, 1960/1961. タイプ打ちの原資料の一部でこのタイトル部分は1枚からなる。

34）Scuola Preparatoria di Orientamento e di Avviamento Professionale, *Relazione finale-anno scolastico 1957-58*, pp.4-5.

35）Tassinari, *La scuola dell'Umanitaria*, p.229.

36）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, p.179.

37）Scuola Preparatoria di Orientamento e di Avviamento Professionale, *Relazione finale-anno scolastico 1957-58*, p.4.

38）*ibidem*.

39）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, pp. 188-190. Scuola preparatoria di orientamento e avviamento professionale, *Attività Parascolastica*, 1959/188 n.2. 後者はタイプ打ちの原資料の一部で、このタイトル部分は1枚からなる。

40）Scuola Preparatoria di Orientamento e di Avviamento Professionale, *Relazione finale-anno scolastico 1957-58*, pp.4-5.
41）Società Umanitaria, *Relazione sull'attività sociale dal 1961 al 1965*, 1966, p.60.
42）*ibidem*.
43）現物を確認した。
44）Chiappano, *Risposta alla riservata*. n.3164/21 del 15.1.1960. 学校教育事業責任者キャッパーノからミラノの教育委員会の長宛の1960年１月25日付の報告書。
45）Società Umanitaria, *Relazione. Sull'attività sociale dal 1961 al 1965*, p.60.
46）Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria dalla sua fondazione ad oggi*, 1 maggio 1911, p.60.
47）*ivi*, pp.60-61.
48）*ivi*, p.70.
49）Società Umanitaria, *Relazione sulla attività sociale dal 1956 al 1960*, p.42.
50）Riccardo Bauer, *Discorso sulla istruzione professionale*, in "Critica sociale", n.6, 1951, p.85.
51）中嶋佐恵子「イタリア寄宿型成人教育の展開」、pp.57-59。
52）同掲、p.63。
53）同掲、p.60。
54）Società Umanitaria, *Dalla scuola di avviamento alla scuola media di orientamento*, p.131.（pp.131-137 はキャッパーノが執筆している。）
55）*ivi*, pp.132-134.
56）*ivi*, pp.131.
57）*ivi*, p.136.
58）Franco Cambi, *Ricordo di Gastone Tassinari*, in "Studi sulla Formazione/Open Journal of Education", 14(1), 2011, p.184. (https://doi.org/10.13128/Studi_Formaz-10802)
59）Franco Mereghetti, *Un' esperienza innovativa all' Umanitaria: dalla scuola di avviamento alla scuola media unificata*, in Fondazione Riccardo Bauer (a cura di), *Riccardo Bauer Quaderno 3*, Fondazione Arnoldo e Alberto Mondadori, 1991, p.98.
60）Chiappano, *La formazione degli insegnanti*, in Mario Melino (a cura di), *Riccardo Bauer*. p.174.
61）Società Umanitaria, *Relazione. Sull'attività sociale dal 1961 al 1965*, p.59.
62）Tassinari, *La scuola dell'Umanitaria*, p.223.
63）中嶋佐恵子「イタリア民衆教育の概念と内実」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第27号（2014年１月）参照。